

トピック

活発な人材交流を促す
産学連携の新たな拠点

2023年4月、長崎県立大学シーボルト校に「情報セキュリティ産学共同研究センター（愛称：NAGASAKIセキュリティベース）」が開設する。3階建ての施設には、「研究室」や「実験室」の他、仮想ネットワーク環境を備え、100名規模の人員を収容できる「情報セキュリティ演習室」、イベント・交流の場として活用できる「フューチャーコリドー」、さらに企業などが入居できる「共同ラボ」を設置。企業、大学の教員、学生が緊密に連携し、共同研究を進められる環境を整えている。

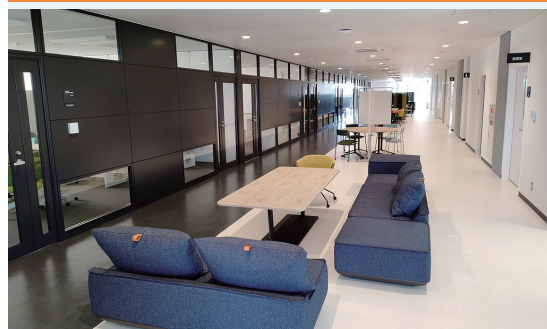
2階、3階にも、入居者らが自由に情報交換や議論をしながら作業できる「コミュニケーションワークスペース」があり、活発な人材交流を促す設計となっている。



情報セキュリティ産学共同研究センターの外観



フューチャーコリドー



コミュニケーションワークスペース

●お問い合わせ先／長崎県立大学 <https://sun.ac.jp>

し、解決策を見いだす力。用意された正解を探すことではありません。高校までの学びとは大きく異なるので、学生のマインドを切り替えることを強く意識しています。

福光 実際、正解は一つではありませんしね。いかにより効果的、効率的なアイデアを考え出せるかが現場では大事になってくる。その意味で私は、学生に「疑問」を持つてもらったことも重視しています。授業や自主学習の中で感じた疑問をきっかけにして、より深く考えるよう促しています。

小林 そこで利いてくるのが多様な専門バックグラウンドを持つ当学科の教員陣です。セキュリティの幅広い疑問に対応し、相談に乗れる体制が整っていますから。松崎 日常的に「その内容だったら、あの先生に聞いてみよう」といったやりと

りがありますね。点ではなく、面で学生を支えられる。これは私たちの大きな強みです。

**情報社会の未来を変える
基地となることを目指す**

——新たに開設する「情報セキュリティ産学共同研究センター」の機能や役割について教えてください。

小林 センター内の共同ラボには複数の企業の入居が決まっており、文字どおり産業界との共同研究の拠点です。企業と学生が交流することで実践的な教育も進め、一方で地域の企業と入居企業の連携の場にもなり得ます。研究成果を一部の企業だけで活用するのではなく、情報社会の未来を支える基地になりたい。そうした思いから、愛称を「NAGASAKI

「サイバー攻撃が巧妙化・複雑化している一方で、我が国のサイバーセキュリティ人材は質的にも量的にも不足」^{※1}。そうした状況の中、2016年に国内初^{※2}の情報セキュリティ学科を設置して以来優れた人材を輩出しているのが長崎県立大学だ。アカデミアで研究を重なる教員と民間企業出身の教員がバランスよく在籍し、最先端技術から実務に即した対応まで幅広く学べるのが特徴。今年4月には「情報セキュリティ産学共同研究センター」が開設予定で、企業との共同研究もさらに活性化することが見込まれる。県内外から注目を集める情報セキュリティ学科では、何を重視し、どのような取り組みをしているのか。松崎なつめ学科長、小林信博教授、福光正幸准教授に聞いた。

この世界では、既存の技術は必ず古びていきますから、常に新しいものを吸収していく必要がある。その姿勢の大切さを伝えることは教員の重要な役目の一つだと思います。

小林 その挑戦、探求を支えるのが、初めに話のあった土台となる確かな知識です。「これは大学で学んだ」と思えば、それが自信になる。どんな課題にも自信を持ってチャレンジできる基礎、基本を身に付けた人材を育てていきたいです。松崎 加えてもう一つ、情報セキュリティに関わる人間に不可欠なのが「誠実さ」です。どうすればより良い社会を実現できるのか。何が社会にとっての正義なのか。そうした観点で物事を考えられる責任感や倫理観を養成していくことも、教育機関としての大学の重要な使命だと考えています。

未来を開く「人間力」を育む 長崎県立大学 ①

「情報セキュリティ学科」編

“土台となる知識”と“誠実さ”を備え
挑戦、探求を続けられる力を養う

写真左

小林信博

(こばやし・のぶひろ)
長崎県立大学 情報システム学部
情報セキュリティ学科 教授

写真中央

松崎なつめ

(まつざき・なつめ)
長崎県立大学 情報システム学部
情報セキュリティ学科 学科長

写真右

福光正幸

(ふくみつ・まさゆき)
長崎県立大学 情報システム学部
情報セキュリティ学科 准教授

「答え」を教えず
学生の「疑問」を大事に

——これからの社会における情報セキュリティをどう捉えていますか。

松崎 一言でいえば、情報社会の「インフラ」として役割がますます大きくなっていくと考えています。暮らし、ビジネスに関わるあらゆる情報がデジタル化される中、それを安全・安心に活用するには、あらかじめ情報セキュリティを織り込んだ製品づくりやシステム構築が求められています。

小林 私は電機メーカーの出身ですが、

まさにセキュリティ対策は製品開発の大前提。近年はIoTにより、家電や車、ビルや工場など従来ネットワークにつながっていたものが一気に接続されるようになり、守備範囲は急速に拡大しています。——そうした中では、どんな教育が大事になりますか。

福光 私は暗号理論を専門にしていますが、単に暗号に詳しくいいたいというわけにはいきません。例えば、数学や統計学の知識も必須です。暗号に限らず、情報セキュリティは隣接する学問領域が非常に広く、時に「総合科学」とも表現される。まさに総合的な能力、視点を養うことが重要になります。

松崎 そのために欠かせないのが土台となる数理や情報技術の知識。基礎的な知識がないと、新たな事象や未知の危機に対応できません。情報セキュリティ学科で学生が情報セキュリティ自体を本格的に学ぶのは2年生の後半からで、それまでは情報科学の基礎を徹底して学ぶカリキュラムになっています。

小林 表面的な情報セキュリティの手法だけを知っていても、それはすぐ陳腐化してしまいます。日々巧妙化する攻撃に、柔軟に対応できる人材を育成することは私たちの大切な使命です。

——授業や演習でどんなことを意識していますか。

松崎 「答え」を教えないようにしています。情報セキュリティの現場で重要なのは、自分で情報を集めて、それを分析

※1 総務省「令和4年版 情報通信白書」より。

※2 国内の4年制大学として初の情報セキュリティ専門の学科。長崎県立大学調べ。